

子どもフォーラム in 綺羅星 7 への提言

山本 健慈

和歌山大学生涯学習教育研究センター教授(センター長)

社会福祉法人アトム共同福祉会会長理事



大人の努力を議論する場

5 歳程度の子どもであれば、大人と同じ風景を見て、色々なことを感じたりしています。

大人が「子ども達のために」という理由で一生懸命やっているのはわかるけど、もしかすると子ども達は「大人は全然見当違いのことをやっているなあ」と思っているかもしれません。このことを口に出さないだけです。

もちろん、小学生になればもっと感じていることがあって、言いたいことがある。中学生になればもっともって感じていることがあって、言いたいこともある。しかし、聞いてくれる相手として大人を見ていないということが、今の様々な問題に蓄積されているように思います。

子ども達はどのように大人の努力を見ているのか、そして何を感じているのかを議論する場があっても良いと思いますし、それが必要なのかもしれません。

大切なのは「子ども達に聞いてみること」

私自身は、これまでずいぶん大人は見当違いなことをやってきたのではないかと、思っています。先生や親も見当違いなことを一生懸命やっていると、もちろん苦しいものです。また、それらのギャップを親子の対話という形で埋めていくのは非常に大変な作業です。

そして、昔から我々はそんなことはやってこなかったです。実は、親がそんなにがんばって子どもを育てた時代は無いのです。しかし、なぜ昔の親が感謝されたかという、「お米の無い時期に一生懸命ごはんを食べさせてくれた」という極めてシンプルなメッセージを子ども達に投げかける手段があったのです。

今の時代は、子どもの気持ちも聞いてやらなくてははいけないし、他にもいろいろやらなくてははいけないことがたくさんある。しかし、そんな複雑なプロセスをしっかりと完結させた親なんて、今まで時代にはいなかったのです。

「こういうことをやりなさい」と脅迫されたり、やらないとバッシングされたりすることが重なる時代ですから、今の親が子育てに不安を持つ気持ちもよくわかります。

子どもは心に浮かんでいることがたくさんあり、言いたいことがたくさんあるわけですから、保育園や学校、そして地域において、「子どもが語り、大人が耳を傾ける」という場を作っていくことは大切だと思っています。この子どもフォーラムにおいても、今後、子どもが大人の努力に対して何を

感じていて、どんなことが伝わっているのかを語りあうことができればと思います。

“地域のつながり”と“縁”で大人が動く

そして、「子どもが語り、大人が耳を傾ける」ということを、このフォーラムであれば実現できる気がするのです。

益田がすごいと感じるのは、「子ども達のために」というスローガンのもとに、これだけ多くの大人達が動いているということです。動く仕掛けを作ったプロデューサーもすごいと思いますし、それを受け入れるだけの基盤が益田には残っていたのでしょう。これは、どの地域でもできるというわけではありません。益田のように“地域のつながり”や“縁”というものがあるのは、非常に貴重なことです。

それぞれのエピソードから、子どもの立体像を把握する

子ども達をより正確に把握するためには、まわりにいる大人達が日々の体験やエピソードを語ることが重要だと思います。親から見る子どもというのは、親心もあるため極めて一面的です。また、教師から見た子どもも一面的と言って良いでしょう。それぞれの立場からすれば、その捉え方で良いと思います。

しかし、今は昔と比べて、それらを総合化し、いろんな角度から見つめることで1人の子どもの立体像が浮かび上がらせる、というプロセスが無くなってしまったのだと思います。昔は意図的にそれを作っていたわけではありませんが、大人どうしの様々な縁の中で自然に生まれていったものです。

益田のボランティアハウスでは、子ども達は多くのおじいちゃんやおばあちゃんと触れ合う機会があります。きっと、それに参加されている地域の方々も、子ども達に対して感じることもあるでしょう。家庭、学校、地域で、その子どもに関わっている大人達が、それぞれの立場でその子のエピソードを語ることは、一面的だった情報を多面的にさせます。

そうすることで、「その子どもに本当に必要なものは何か?」「自分に何ができるのか?」ということがはっきりしていくのではないかと、思います。

私に関わっているアトム保育園のクラス懇談会では、保育士と親が子ども達に対してのエピソードを語り合います。対応に苦しんでいるという相談をすることもあれば、最近気が付いたことなどもあります。立場や場面が違う人が語り合うことによって、その子どもの課題や良さが見えてきたりします。

そして次に、どのような手立てでお互いが知恵を出し合ってやって行こうとするか。これを少し硬い言葉で表現すると、「その子どもと付き合う技術の開発がされる」ということだと思います。

昔は子どもの数も多かったので、親も「親の練習」を何回もすることができました。しかし今は子どもの数も少ないので、練習できても1回か2回程度です。これですぐにホームランを打てと言わ

れるわけですから無理な話ですね。

このエピソードを語る作業は、子どもだけでなく親にとっても1つの成長過程であると思います。

エピソードを語る場合のポイントは何か？

エピソードを語る際のポイントは、「“ヒト科の動物”を、どうやって共同社会で役割を果たせる“人間”へと育てるか？」というシンプルなものです。このために、家庭、学校、地域としてどんなことができるか？この視点で私達はエピソードを語っていけば良いと思います。

世間で取沙汰されている学力の問題についても、「本当の学力とは何か？」ということ、このような視点から捉えていくことが大切でしょう。

今回のフォーラムのように、多くの方がいろんな角度から議論するという事は非常に大切なことです。今後、子ども達がそれに参加し、意見を表明し、大人もそれを受け止め、子どもとやりとりしていくことができれば、非常に水準の高い教育改革プランが益田市から生まれていくことでしょう。